

2018 年度卒業論文

韓国社会におけるシティズンシップ教育
—京畿道龍仁市水枝区ヌティナム図書館を事例に—

指導教員 西山志保

(社会学科)

社会学部 現代文化学科

学生番号

八重樫 瑞

〈目次〉

序章. はじめに.....	1
第1章. 先行研究	
1-1. シティズンシップと成人教育.....	2
1-2. 韓国におけるシティズンシップ教育.....	3
1-3. 事例分析の「ものさし」.....	5
第2章. 龍仁市の都市化背景と問題	
2-1. 龍仁市の都市化.....	6
2-2. 都市化に伴う問題.....	8
第3章. 事例調査—ヌティナム図書館	
3-1. ヌティナム子ども図書館創立背景.....	9
3-2. ヌティナム子ども図書館としての活動.....	11
3-3. 公共図書館としての新たな役割.....	11
3-4. ヌティナム図書館の原則.....	12
3-5. ヌティナム図書館の「日常」.....	14
3-6. 取組①京畿道地下鉄書斎「開かれた図書館」.....	15
3-7. 取組②「社会を込めたコレクション」.....	17
3-8. 取組③「共論場」マウルフォーラム.....	19
第4章. 事例考察	
4-1. 「図書館」という空間でこそできること	
4-1-1. 「図書館」の役割.....	22
4-1-2. 公立ではなく「私立」図書館だからこそ可能なこと.....	24
4-2. ヌティナム図書館におけるシティズンシップ教育	
4-2-1. 地域や社会に対する愛着.....	25
4-2-2. 自発性.....	25
4-2-3. 変化に対応する力.....	27
4-3. ヌティナム図書館の展望.....	28
最終章. 結論.....	29

序章. はじめに

韓国社会は世界の数ある国の中でその成長と変化が急速であるといっても過言ではない。1953 年に朝鮮戦争休戦協定を結んだあと、軍事態勢や民主化など政治的な変化も激動であったが、焼け野原から現在の姿まで経済的な成長も急速なものであった。このような社会の変化は現在もなお日々進行している。ここ数年で起きた最も大きな変革といえば、やはり「朴槿恵大統領弾劾訴追」である。朴槿恵大統領の親友である民間人、崔順実が国税に関与していたことが発覚した事件以降、毎週土曜日に光化門広場で全国各地から市民が集まり退陣を求めるデモが開催された。21 世紀最大のデモとも呼ばれるほどの市民の声を受けて、朴槿恵大統領は退陣した。このように民意が社会を変えた改革は、韓国市民の誇りになっている。こういった事件を経て、今韓国市民たちは「自分たちの住む社会を自分で創ってこう」とする意識が高くなっている。言い換えれば、自分たちが市民として国や行政が与えてくれるものをそのまま受け入れるのではなく、どういった国や地域に住みたいのかを自ら学び考えようとしている。こういった市民たちの学びをサポートするシティズンシップ教育の拠点が全国各地で整われ始めている。

この論文で事例として扱う、京畿道龍仁市永^{ヨンイン}枝^{スジ}区にある私立図書館「ヌティナム図書館」は市民全員に開かれた、学び考え、それを共有する空間としてシティズンシップ教育を担ってきた。この図書館は「教えなくてもより大きい学び場」して子ども図書館として創立された後、龍仁市の状況変化に伴い市民全員を対象としたものとして生まれ変わった。この創立から現在の姿に至るまでの背景には、もともと田畑に囲まれた農村地であった龍仁市が現在のようなベッドタウンへと変化する過程で生じた様々な社会問題が関係している。本論文では龍仁市の都市化とヌティナム図書館で行っているシティズンシップ教育を結

び付け、ヌティナム図書館が地域および市民にとってどういった影響を与えているのかを分析することで韓国社会一般におけるシティズンシップ教育の効果と必要性を明らかにする。

はじめに第 1 章で研究に至った問題意識について述べた後、先行研究として、①社会学におけるシティズンシップ論の中でも「行動的シティズンシップ」とは何か、成人教育が果たす効果について②韓国におけるシティズンシップ教育の現状と批判③事例分析の観点としてシチズン・リテラシーについて説明する。次に第 2 章では今回事例として扱う京畿道龍仁市がどのような都市化過程をたどっていき現在の姿になったのか、その過程で生じた具体的な社会問題について明らかにする。そして第 3 章では、今回事例として扱う「ヌティナム図書館」が初めは子ども図書館として設立されたのち、市民全員を対象とした図書館に姿を変えていった背景を示し、現地でインタビューした内容をもとに現在行われているシティズンシップ教育の具体例を整理する。そして第 4 章では前章をふまえて、ヌティナム図書館のシティズンシップ教育をシチズン・リテラシーの観点から分析し、今後の展望を示す。最後に第 5 章で結論として今回の事例ヌティナム図書館の研究から、韓国社会一般ひいては日本社会におけるシティズンシップ教育の意義をまとめる。

第 1 章. 先行研究

1-1. シティズンシップと成人教育

「シティズンシップは、一般的には近代社会の成立以降に誕生した国民国家が自ら構成員を規定し、彼らに付与する権利と義務に関する法的かつ政治的な概念として理解されている」（不破、2002、13）。シティズンシップに関する議論は長年にわたり様々な学者によって問われてきたが、その出発点の多くはイギリスの社会学者 T・H・マーシャルの論である。

マーシャルによると、シティズンシップは史実によってもわかるように、「市民的、政治的、社会的」という呼び名で三つの部分ないし要素に区分できるという。市民的要素は個人の自由のために必要とされる諸権利からなっている。すなわち、人身の自由、言論・思想・信条の自由、財産を所有し正当な契約を結ぶ権利、裁判に訴える権利である。政治的要素とは、政治的権威を認められた団体の成員として、あるいはそうした団体の成員を選挙する者として、政治権力の行使に参加する権利のことを意味している。最後に社会的要素とは、経済的福祉と安全の再証言を請求する権利に始まって、社会的財産を完全に分かち合う権利や、社会の標準的な権利に照らして文明市民としての生活を送る権利に至るまでの、広範囲の諸権利のことを意味している。19 世紀後半の初期の時代において、これら三つの要素はその分化がはっきりとしたものではなかった。それは、国政や立法が厳密な分割線によって分けられておらず諸制度が融合していたがゆえに、政治的制度および権利や市民的制度および権利もまた混合していたのであった。ゆえに、歴史をたどってみればシティズンシップの三つの要素が依拠していた諸制度が分離したときはじめて、それぞれの要素は各々の速度で発達していき、それは 20 世紀に入って初めて見られた現象であった。

上述したようにマーシャルは、シティズンシップについて言及するにあたり、シティズンシップが歴史の流れや社会的階級の変化の中でその対象が変化していったことに言及していた。この指摘は第二次世界大戦を終えてから現在にわたるまで通ずるものである。1989 年のベルリンの壁崩壊に見られる行動的市民や、ヨーロッパ連合の統一によって国単位の独自の制度や文化を超越した新しい政治、社会などは既存の価値観のみでは説明の出来ないものである。こういった「グローバル化」が進む中で基本的人権や民主

主義の基本的価値の尊重と遵守が改めて重視され、同時にこの普遍的価値を積極的に取り込んだシティズンシップ概念の再構築が課題となった。

社会学者の不破和彦は、こうしたシティズンシップをめぐる今日的な状況に関して 1997 年に開催された第 5 回ユネスコ成人教育国際会議の宣言（ハンブルグ宣言）を引用しながら説明している。「基本的人権の尊重と遵守にならんで、シティズンシップ権利として成人男女が社会的諸活動へ参加する機会の制度的な拡充を価値の基調に据えた、民主主義的市民社会の構築がすべての社会にとっての普遍的な理念として措定されている。そして、この理念の実現にとって、成人男女の内省的思考に支えられた行動的シティズンシップ（active citizenship）が必須の要件として指摘されている。つまり、権利の単なる受動的な保持者としてではなく、個人として自立し、しかも社会の多様な次元で集合的に行動する実践的な行動者としての市民が存在する」（不破、2002、12）。本論文では一市民が与えられたものを受動的に享受するだけでなく、自発的な学びと実践をもって社会に参画する「行動的シティズンシップ」を習得するための教育を「シティズンシップ教育」と呼ぶ。

ハンブルグ宣言では、「成人教育は行動的シティズンシップの結果であるとともに、また社会への十分な参加にとっての条件でもある」と述べられている。不破は「人びとが日常の生活、労働そしてコミュニティでのボランティア組織、非政府組織、非営利組織さらには市民運動、社会運動や多様なネットワークなどへの参加の過程からシティズンシップを学習することは、自らそれら一連の過程において権利と義務の責任ある行使に行動的に関与することを介して可能となる（不破、2002、29）」と論じ、シティズンシップの教育と学習が行動的シティズンシップと行動的市民の発達に有効であることを以下のように説明している。

「前述したハンブルグ宣言が明言しているように、今日の成人教育は成人の教育・学習権の行使に応える一つの対象として存在するにとどまらず、基本的人権の理解と尊重にもとづく人間中心主義の発達に取り組むことが重要な課題となってくる。したがって、成人教育は、あらためて成人に民主主義の基本的価値にもとづくシティズンシップ権利と義務の概念、役割と意義、および民主主義との発展的な不可分の関連などについて全体的な理解を広く提供する機会の設定が、役割として強く求められる。」

1-2. 韓国におけるシティズンシップ教育

シティズンシップ教育は各国の事情によってその内容と目標が異なる。韓国においては、持続可能な民主主義の発展を市民の意識から支えるための教育という意味で「民主市民教育」と呼ばれている。韓国においてこの民主市民教育が重要視される要因としては、戦後に急速な民主化が進められたことが挙げられる。韓国では1987年以降、社会のあらゆる分野において民主的な制度が設けられた。しかし、制度として民主化が進められ整われていくのとは異なり、市民たちの意識の中では民主主義の基本的原理がどういったものなのかという理解が浸透していないというギャップが生まれた。1990年代後半以降、韓国の民主主義の発展は停滞し、市民の要求と利益の衝突で社会の紛争処理にかかるコストばかりが増加していった。そこで国として民主化の行き詰まりを解決し、今後持続可能な民主主義の発展を担保する市民教育に力を入れることになったという背景がある。また、グローバル化が進む中で市民の意識や価値観にも大きな影響を及ぼす中、民主主義社会の構成員としての意識を啓発するためにも有効な手段としてシティズンシップ教育が認識された（高、2011）。

民主市民教育の概念は広い意味において、社会・政治的秩序の構成員であるすべての人たちに集団・組織・制度及び媒体を通して政治的に影響を与えるすべての過程を包括する集合概念である。狭い意味においては、民主市民教育は青少年と成人が社会・政治生活の参与に必要な資質を備えられるように意識的に計画され組織されたもので、持続的かつ目標志向的なすべての教育機関の措置を指す集合名称である。民主市民教育は政治教育や政治社会化と同じ意味で使用されることもある。それは民主市民教育を「政治的学習」や「各個人の政治的思考と行動様式を獲得する発達過程」と見るときに政治教育の意味と大きな違いがないためである。

民主市民教育が韓国社会において果たす効果は大きく四つから説明できる。一つ目は「憲法的価値である国民主権の原理を実現すること」である。国民が主権者として政治過程に参与し権利と義務を積極的に遂行できるよう民主市民教育は主権者意識を養成する必要がある。結果として共同体の意思形成に実質的に参与できる力を学習するということだ。二つ目は「民主主義の原理を学習すること」である。民主市民教育は対話や少数意見の尊重と配慮が前提になければならない。こういった民主主義の原則の理解を促す教育が必要である。三つめは「国民の政治的意思形成に参与すること」である。国民は共同体運営に自信の意思を積極的に反映させ、国民の政治的意思形成を担当する活動に能動的に参与できるようにする。最後に四つ目は「民主市民社会に適合した力のある市民育成」である。民主市民とは主権者としてその役割を実践し、民主主義政治体系のなかで生きながら積極的に意思決定に参与することが求められる。民主市民は最初からそのアイデンティティと資質を持って生まれるのではなく教育を通して形成されるものである。民主市民教育を通してこそ、シティズンシップは形成されるものであると

いう考えから韓国社会で実践されている。

次に、韓国社会で全国的に行われている民主市民教育の実例を見る。民主市民教育は前述したとおり「民主主義意識育成」という部分に焦点がおかれていることから、国民の誰もが権利を持つ選挙の中心である選挙管理委員会によって担当されるものが最も代表的である。選挙管理委員会では「問題解決」を中心にした授業で能動的な参与が基本となったプログラムを行っている。プログラムは選挙関係者や一般有権者、未来の有権者である青少年などその対象によって異なった能力育成を促すように構成されている。表は各対象者別に実際に行われているプログラムである。いくつか説明を加えると、「韓国社会定着援助過程」とは、多文化家族研修及び北朝鮮からの脱北住民研修を指すもので、主権者意識の育成と民主主義や選挙制度適応を通じて韓国社会への早期定着を援助するため、全国の多文化家族センターと北朝鮮脱北住民・青少年を対象に行われているものである。また、「新米有権者研修」とは正しい価値観と選挙や政治に対する参与意識を高めるために高校３年生を対象に学校で出張講義を行っている。毎年 300 回程度（区、市、郡別で 1 回程度）実施されている。

選挙・政党関係者研修	一般有権者研修	未来有権者研修
<ul style="list-style-type: none">・ 政党事務局幹部研修・ 党員研修・ 選挙アカデミー	<ul style="list-style-type: none">・ 大学生政治参与過程・ 教員研修・ 韓国社会定着援助過程（外国人居住者対象）・ 女性政治参与研修	<ul style="list-style-type: none">・ 青少年リーダー研修・ 未来指導者政治キャンプ・ 新米有権者研修

表 1 選挙管理委員会主催の民主市民教育プログラム

こういった取り組みが行われている中で、韓国社会における民主市民教育に対する論議を整理すると、

①政治秩序ないし政治体制の安定を維持するため国民の指示を形成すること、②政治に関する研究と政治過程の参与に必須である知識と技能、態度を獲得すること、③国民が国家の主権者として国家と地域社会で起きている政治現象に関して客観的知識を持ち、政治的状況を正しく判断、批判する意識を養うこと、④政治過程に参与して権利と義務を積極的に実行し、責任を持つよう家庭や学校、社会で行うこととまとめられる（コ、2015）。

しかし、このような行政主導で行われるシティズンシップ教育では限界があることにも着目しなければならない。社会学者のE・ハミルトンは「公教育の制度にもとづく財政支出」がなされ、学習目標をもった成人学習者に対して組織化された教育を提供する「フォーマル教育」に批判のまなざしをむけている。フォーマル教育は若者を社会化するための装置として効果的であったこと、学校という共通の経験の場を提供し、急速な技術革新の成果を普及させるための教育として役立ってきたことを評価したものの、一方ではフォーマル教育は、成人を対象とする部分をはじめとして、多くの欠点と矛盾を抱えていることを指摘した。教育の内容と方法を供給側が一方的に決めつけるようなやり方では、現代にある様々な社会問題に対応する能力の育成には不十分だということだ。同時にハミルトンは公教育ではなく市民団体が自分たちで教育の場を創っていく「ノンフォーマル教育」が社会変革を起こす可能性を評価している。ハミルトンはシティズンシップ教育を「地域づくり」と関連付けながら、社会の発展を目指した市民参画の原動力として、教育は明らかに必要であると主張している。どのような状況においても、成人市民が地域や社会に貢献することが改革と変容を進めるためには必要であり、それらのためには市民自身が十分な情報を保有していなければ自らの役割を果たすことはできない。その情報を提供する場こそが、社会の変化に柔軟に対応して

いくノンフォーマル教育なのである。

1-3. 事例分析の「ものさし」

先行研究からわかるように、現在の社会に期待される市民の姿とは、行政から与えられるものを受動的に受け入れるのみの市民ではなく、自ら自発的に学び考え、あるべき地域や社会の姿を描き実践に移せる「行動的市民」であるといえる。また、こうした行動的市民の育成のためには既存のフォーマル教育ではなく、市民が主体となってまた違う市民の意識を高めていくノンフォーマル教育が有効であることが分かった。そこで、今回事例となる京畿道龍仁市ヌティナム図書館の事例を調査したのち、分析する段階において「シチズン・リテラシー」の理論が適当であると見た。

行動的シティズンシップに関連して、法学者の鈴木崇弘は民主主義が完成され固定化された政治システムではなく、正しく機能するためには自由さや多様さのほかに社会的ルールや慣習、義務といったパブリックなものが必要になることに言及しながら、市民の役割について説明している。その中で、鈴木は市民が身に着けるべきスキルや素養の総体を「シチズン・リテラシー」と定義した。「これからの市民には、単に社会的問題意識をもっているだけではなく、自分および家族、自分の住む地域や社会や市民に愛着をもち、もっているがゆえに、パブリックに関わり、それをよりよくしたいと考えることが望まれる」とし、「社会が市民を育て、市民は社会にかかわることで成長し、市民が社会を育てる」（鈴木、2005、19）が必要であると論じた。

シチズン・リテラシーの中身は時代や社会で絶えず変化するものである。それは民主主義社会の「レゴ

(LEGO) 』のような存在であり、市民がパーツ（部品）を組み合わせることで、自分の社会に適した形態の民主主義を構築し、状況に応じて変えていくもので、市民がパブリックで役割を果たすための基礎になるものである。鈴木が定義するシチズン・リテラシーは、自ら学び考え行動する主体的な行動的市民が兼ね備えるべき能力であるといえる。

このシチズン・リテラシーの定義によれば、行動的シティズンシップの中身ともいうべきキーワードになるのが

- (1) 地域や社会に対する愛着：自分の住む空間に親しみを持ち、よりよくしたいと思う
- (2) 自発性：自ら地域や社会について関心を持ち学ぼうとする姿勢
- (3) 変化に対応する力：地域や社会の変化を察知し新たな能力をはぐくむ

以上の3つであるといえる。事例分析にあたる第4章では、上記3つのキーワードごとに内容を整理し、ヌティナム図書館がシティズンシップ教育にどう貢献しているのかを分析する。

第2章. 龍仁市の都市化背景と問題

この章ではヌティナム子ども図書館が設立されるに至った背景として龍仁市の都市化過程を見ていく。

ここでは主に『龍仁市住宅市場の成長と空間的分化に関する研究』（ジュ・ギョンシク・パクヨンウ、2010）を参考にし、都市化の要因と具体的な変化を示す。

2-1. 龍仁市の都市化

パブルセブン地域¹の一つである龍仁市はソウルの都心から20 kmしか離れていない、京釜^{ギョンブ}高速道路、^{ヨンドン}嶺東高速道路が交差している利便性の高い地だ。1990年代中盤以降、マンションの持続的な建設が

続き、2000 年代に不動産烈
風まで吹き起こしながら、住宅
市場は急速に膨張した。龍仁
市の大規模開発には1980年
制定された宅地開発推進法
²（法律第3315号）が関係



図1 龍仁市と高速道路

住宅地の多くはマンションであったが、だんだんと市民の多くがマンションを好んで入居していくに従い、首都圏をはじめとしてマンションは全国的に一般的な住宅タイプとして認識されていった。1975年には全住宅タイプ中わずか2%だったものが、2005年には53%におよび国民の半分以上がマンションに居住していることがわかる。また、1975年から2005年の間に一軒家の単独住宅は9.1%減少した一方、マンションは7325.3%も急増した。龍仁市住宅市場の急速な成長もまた莫大な数の新築マンションが供給される過程で進行した。全住宅数が5万軒だった1995年にはマンションよりも単独住宅が多かったが、その後単独住宅は増加せず龍仁市の住宅全体で増加したのは大部分マンションであった。2010年に約20万軒ある龍仁市全体の住宅中、アパートが占める比率は77%だがと、行政区域別に差がある。ヌティナム図書館のある水枝区は95.7%に対して^{チョイン}処仁区はわずか36.3%であった。龍仁市に多くのマンションが

建設されたことは公共部門と民間部門による大規模宅地開発が一緒に行われたためである。特に水枝区には 10 数か所の公共宅地開発が実施された。この地域は高速道路があるため新葛ジャンクションを中心に 4 つの地区に分離されており、北西地域にある^{フンドクチョンドン}豊徳川洞と^{シンボンドン}新鳳洞を中心に京釜高速道路、嶺東高速道路を越えて時計回りに回りながら宅地開発が行われている。また、次第に開発が拡大していくにつれて初期にはソウルや分盆に近い嶺東高速道路以北地域を中心に住宅が建設されたが、空き地が減っていくにつれて相対的に交通の利便性は低い地域まで開発が及んだ。

公共住宅の建設以外にも龍仁市は民間宅地開発による住宅建設が大きな比重を占めていた。これ

は 1994 年に円滑な宅地供給のための準農林地制度³が導入されるにしたがい公共部門が担当した宅地造成を民間にも許可したためだ。

1990 年代後半、民間建設

業者たちはこぞってソウルの郊

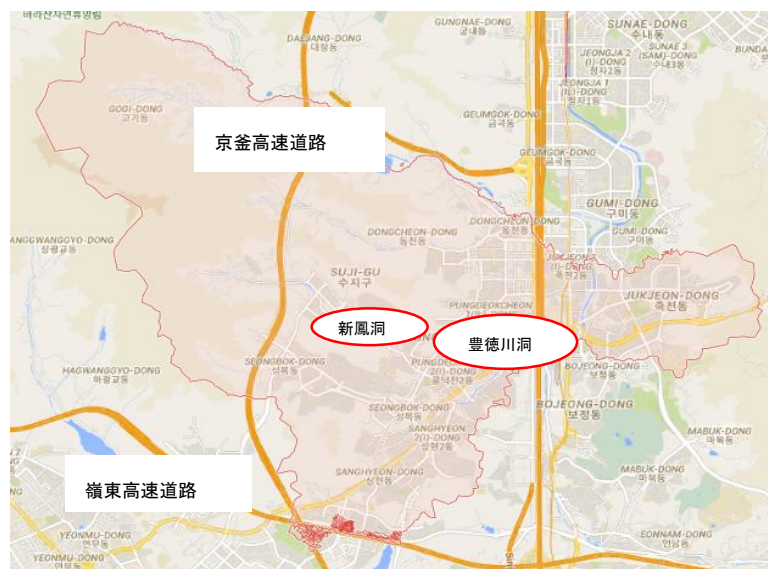


図 2 水枝区行政区域

外地域の準農林地を買い占め住宅を建設し、特に大型建設業者たちは単独住宅ではなくより多くの利益を創出できるマンションの建設に流れた。龍仁市の建設時期別住宅比率に着目すると、1990 年以前に建設された住宅の比率はわずか 4.1%であり、2000 年代に建てられた住宅がおおよそ 60%に達する。

特に水枝区（71.3%）と^{ギフン}器興区（68.5%）は首都圏の中で 2000 年代に建てられた住宅の比率が

一番高いが、これは首都圏で龍仁市がこの時期に最も大きく成長した地域であることを示している。この背景には民間部門による大規模な宅地開発が行われたことだけでなく、IMF 金融危機克服のために政府が住宅の供給と所有を推進しようとする規制緩和を実施した結果でもある。

２－２．都市化に伴う問題

次に宅地開発により生じた問題に着目する。龍仁市の開発と都市化によって引き起こされた最も大きな問題は地域の基盤といえるものがなかったことだ。乱立されたマンションに引っ越してきたのはもともと龍仁市に住んでいた人たちではなく、マンションを購入したことで初めて龍仁の地に足を踏み入れた子どものいる家庭が多かった。しかし、マンションというハコのみが先立って建てられた場所には、市民たちが利用できる公共サービスの整備は整っていない状態であった。公共図書館も当時龍仁市全体にたった一つという状況であった。もともと開発がすべて一貫した管理下で行われたわけではないため、行政側も人口の急増に伴う様々な問題への対応に追われた。夢を持って越してきただろう市民たちは、暮らし生きる場所として何も整っていない状況に困惑した。さらにその困惑は、流入してきた市民のみではなく、もともと龍仁の地で生まれ育った原住民たちをも巻き込んだ。次々と慣れ親しんだ場所がなくなり、都市として成長していくなかで行き場をなくしていった。混沌の龍仁市にヌティナム図書館を創立したパク・ヨンスクさんも開発が真っ只中な中、新築されたマンションに引っ越してきた市民の一人であった。

第３章．事例調査—ヌティナム図書館

第2章で記したように、龍仁市はベッドタウンとして成長していく過程で、市で暮らす市民たちへ行政としてしっかりとサービスを提供できていなかった。こういった状況の中でパク・ヨンスクさんは龍仁市で生きる市民として自らができること始めた。それが、ヌティナム図書館の創立である。この章では本論文で扱う事例、ヌティナム図書館について、その創立背景や理念、現在行っている取組について詳細に記述する。

調査実施日	2017年12月13日（水）午後2時～4時半 2018年8月8日（水）午後3時～5時
調査場所	ヌティナム図書館（京畿道龍仁市水枝市）
調査方法	聞き取り調査
被調査者	ヌティナム図書館館長 パク・ヨンスクさん（初回のみ在席） ヌティナム図書館読者開発チーム長 カン・チョルジンさん

今回、本論文を執筆するにあたり、現地で2回聞き取り調査を行った。また、カンからはインタビュー以外にも参考資料の提供やメールでの質疑応答などに尽力いただいた。文献のみならず、聞き取り調査等直接伺ったことについてもまとめて記載する。

3-1. ヌティナム子ども図書館創立背景

ヌティナム図書館は2000年2月に自由なコミュニケーションと学びの場所を創設するため力を注いできた貧民運動家出身のパク・ヨンスク現館長が「地域の小さい図書館が人と世界を変える根源的な力になれる」とい



う信念のもと始めた活動が基盤になっている。ヌティナム図書館は、創立当初「子ども図書館」として出発した。なぜ子供を対象として図書館を開く

うと思ったのか、その背景にはパクさん自身の経験が背景にある。

パクさんがベビーカーを引いて龍仁市水枝区に引っ越してきたとき、韓国社会全体の経済成長に伴い郊外の住宅地として田園地帯の龍仁市が開発真っ只中だった。政府主導ではなく不動産関係者が田畑しかないところに猛スピードでアパートを乱立しはじめた龍仁市に、多種多様な人たちが続々と引っ越してきた。もともと田畑しかない場所が住宅地になっていったため、この土地の基盤といえるようなものは何もない状態だった。図書館も、当時龍仁市にたった一つしかなく、この急激な変化にもともと農業を営みながら住んでいた方々も困惑した。こういったインフラ不足が露呈する地域でパクさん自身が子育てをしながら、子どもたちが思い切り遊べる空間、この地域に大きなヌティナム（けやきの木）が一本あればという思いを抱きはじめてという。しかし、「子どもたちと共にする文化的共同体」という言葉だけでは何をするかわからず、手当たりしだいに青少年や文化、教育に関する資料を集め、市役所や支所を頻繁に尋ねた。開発に忙しい地域で団体でもなく個人に力を貸してくれるところはどこにもないように思えたが、本を介して子どもたちと地域住民に会え、共に文化活動をできる場所として「私立文庫」があるということを知った。

どれほど小さい私立文庫だとしても図書館としての機能を果たすためには専門的な知識が必要であり、江南大学の文化情報学科のサークルと連携を取り、図書館の実務に関するノウハウを学んだ。空間として、子どもたちがたくさん集まれる大きな場所を確保したかったが、個人の力では難しいこともあり、私費 2 億ウォン（約 2 千万円）を投じたが入手できたのはマンションの地下の部屋だった。6 か月の時間をかけて内部工事をし、子どもたちの背の高さにあったいすや机を準備し、3000 冊の本にひとつひとつラベルを貼った。こうした準備の末、2000 年 2 月 19 日に「ヌティナム子ども図書館」は開館した。

図４ 〈ヌティナム図書館の簡略年表〉

1998	誰でも気軽に訪れ本と人に出会い共にできる場所 競争、試験よりも先に自ら学びの動機を見つけ、読書を楽しめる場所 そんな空間を目指して図書館設立計画開始
2000	私立文庫「ヌティナム子ども図書館」開館 トウミ会結成 龍仁市私立文庫登録
2002	「青少年が文化の中心になる小さな図書館づくり」遂行
2003	ヌティナム図書館運営委員会結成 ヌティナム文化財団設立
2005	ヌティナム図書館新舎建設基金募金
2006	ヌティナム図書館新舎土地購入、設計開始
2007	新舎へ移転、「ヌティナム図書館」として私立公共図書館登録
2015	「社会を込めたコレクション(사회를 담는 컬렉션)」 ワークショップ開催
2016	マウルフォーラム開催（春、夏） 新分盆線東川駅、「亭子駅、光教中央駅「開かれた図書館」開館
2017	マウルフォーラム開催（年４回） 分盆線、新分盆線亭子駅「京畿道地下鉄書斎」開館

3-2. ヌティナム子ども図書館としての活動

実際に図書館がオープンすると本の配列や分類など新たな問題が多く生じたが、そのたびに利用者である子どもたちの母親たちが自ら助けてくれ、開館から1か月で「トウミ（助け）会」という名前でボランティアの集まりが作られた。トウミ会の会員たちは子どもたちに読み聞かせをしたり、手作りのおやつを持ってきたりと自分のできることで図書館を主体的に作っていった。こうした姿を見た子どもたちも、自然と自分のできることを手伝い始めた。靴箱を整理したり、他の子どもたちの面倒を見たり、ただ図書館の扉を開けておいただけで、利用者たちは主体的に図書館での自分の役割を見出していった。

はじめはただ、子どもたちに本を見せようと図書館を訪れた人たちが、トウミとして高い金額を払ってもなかなか手に入れることができない素晴らしいプログラムを創っていく姿を見ながら、パクさんは「共にする空間さえあれば」能力を発揮できる人たちがたくさんいるということに気づいた。何かを与えようとする欲は捨てて、ただ一緒にいるだけで十分だということが分かったという。

図書館には必ずしも両親がいて、家で温かいご飯を食べられる子だけが訪れるわけではなかった。片親家庭の子どもや、障がいのある子ども、さまざまなバックグラウンドをもった子どもたちはそう簡単に心を開いてくれるわけではない。しかし、図書館でご飯を食べさせ昼寝をさせ、ただ一緒に過ごす時間を重ねれば重ねるほど、少しずつ子どもたちにも変化が表れ始めた。最初は警戒していた子どもたちも一冊の本を持ってきた職員に読み聞かせてほしいとお願いするようになった。こうした多くの子どもたちとの関わりから、パクさ

んは特別なことは意識せずごく普通に接するだけでよいと気づいた。父親がいて母親がいることを当たり前だと決めつけず、「誰と暮らしてるの？ 一人？」「ママもいて、パパもいるんだ」「ママがいないんだったらあなたが洗濯もするのね」と話しかける。子どもたちは戸惑ったりもするけれど、子どもたち一人一人の事情を何でもないように受け入れることが、子どもたちと距離を縮める一番大切なことだ。

3-3. 公共図書館としての新たな役割

2007 年に現在の新舎へ移転をするに合わせ、ヌティナム子ども図書館から「ヌティナム図書館」に改名した。子ども図書館として出発してから 7 年の歳月の中で地域や社会の変化に合わせてヌティナム図書館の役割もまた変わっていく必要があるからだ。

子ども図書館として開館してから 5 年経った 2005 年には、予想していた速度と規模を大幅に超えて成長していた。登録会員数は 12,000 人になり、1 日に 200 人～300 人の人たちが図書館を訪れた。開館当時 3000 冊だった図書は 15,000 冊に増え、1 日の貸出および返却図書数は平均 1,400 冊にも及んだ。公共図書館がひとつもなかった水枝区が「人口流入率全国 1 位」の新都市として発達しながら成された大きな変化であった。そのうえ、報道やうわさによってヌティナム図書館が多くの人に知れ渡り、地域の人たちの図書館に対する関心も大きくなっていった。図書館はこれ以上本を収納する場所もなく、座席もない飽和状態と化した。やりたいことはどんどん増えていくのに空間の不足で先延ばしにし、諦めな

なければならないことが増えていった。

ハード面の問題だけでない。2000 年から図書館に通っていた子どもたちは 7 年の歳月を経て成長し、それぞれまた違ったサービスが必要になってくる。



図 5 図書館入口にある後援者の名札

また、地域での開発もある程度

安定し、行政やヌティナム以外の市民団体の活動も活発に行われ、ヌティナムが「子ども」だけを対象にする必要がなくなったのである。

開館 5 周年記念を祝い、過去 5 年間で振り返りこれからの 5 年間を描いてみようという思いで農協の講堂を借りて地域と図書館系のゲストを招いた。「幸せな記憶と小さな願い」というタイトルをもって開かれた行事で、図書館を移転しなければならないという必要性を感じ空間確保のための募金活動をはじめた。この行事の後、図書館は一気に活気づいた。新規会員も増え、読書会のような図書館活動も増えた。こうしてよりいっそう多くの人が図書館に関心を持つようになり、図書館運動を継続する理由が明らかになったことで具体的に次の段階に進む道を探さなければならなかった。私立「文庫」を運営しながら確認した図書館の可能性をこれからは「公共図書館」という枠に充ててみようという展望を描いた。そのためには図書館法が定める公共図書館基準面積である 264 m²（80 坪）の空間、子ども図書館の 2 倍の面

積の土地を得ることから始めなければならず、資金を集め設計建設し、実際に「ヌティナム図書館」として開館するまでに2年の歳月を要した。

3-4. ヌティナム図書館の原則

ヌティナム図書館は子ども図書館だったときから、その場所が「図書館」とあるという特殊性を意識して運営されてきた。公共図書館が形成されてきた歴史が指すように、図書館の役割は必要な資料だけを提供するサービスセンターではなく、利用者たちが市民として成長し共に公共性を実践できる力を伸ばす場である（朴、2014）という図書館としての存在意義は以下の「ヌティナム図書館の原則」にも表れている。（ヌティナム図書館ホームページ）

（1）図書館らしさ

多様性	公共性を実現するためには多様性が担保にならなければいけません。生き方も環境も考えも異なる人たちが、その誰一人として排除されてはいけないからです。画一的で平凡な公共性ではなく、表情が生き、呼吸をしている公共性を実践するためには、ありのままの多様性を尊重することです。
日常性	些細な事の価値を貴重なものととらえます。意図しなくとも、出会いの中で自然に起きる逆同を期待します。成果よりは過程に重きを置くために、時間がかかる大変なことでも喜んで取り組むことです。すべての活動を一度きりのイベントではなく、日

	常の生活に活かそうとします。
相補性	<p>一方的な教えや助け、支援を警戒します。競争や評価で動機をつくりません。利用者も運動のパートナーも対象化されないためです。ただ、自ら胸が躍ることを期待しながら主体的に夢を見つけ育てていくことをお互いに応援することです。</p>

（２）図書館の方法で

スティナム図書館と財団のすべての活動は多様性、自発性、日常性を備えた図書館の方式で実践していきます。図書館文化は提供するものではなく、共に作っていくものだと思っているからです。

自発性	<p>何かに没頭している人には、特別な感動を与える力があります。自発的な動機なしにそういった没頭を期待することは難しいでしょう。学ぶことも、互いに尊重し配慮することも、先立って教えたり急き立てたりして引っ張っていくことはしません。自ら理由を探し、力を伸ばせる機会と場所を開いていくことです。</p>
緩さ	<p>違いや差異を尊重します。失敗に寛大であり、変化を受け入れようとしています。n 分の 1 に分けても、例外のない原則に縛られたりもしません。まばらで柔らかさの中に包まれることを、十分な自由と想像力を期待しているからです。</p>
肯定の力	<p>批判や否定よりは具体的な事例と代案をつくっていきます。切実な願いが届くよう声をかけようとしています。すべてのことに繊細に空気を入れ、溢れて疲れ果てないよう淡々と続けていく力を育てていきます。心躍るように、幸せに！</p>

子ども図書館としてスタートし、地域の子どもたちに時にはご飯を食べさせ寝かせていたという話だけ聞くと、それは児童センターのやくりではないか？という疑問も浮かぶかもしれない。しかし、あえて図書館という形で地域に存在するためには、図書館としてのアイデンティティを決して失ってはいけない。ヌティナム図書館が描く「図書館」は「教えなくてもより大きい学び場」という言葉に集約される。子どもでも大人でも障害があっても「誰もが」、図書館で自分が見たいものを見て自分自身で学んでいく



図6 「ヌティナム図書館サービス憲章」

公共性を遵守しサービスを提供することが書かれている（2017年12月筆者撮影）

「知的自由」がかなえられた空間こそが図書館である。その対象が最初は子どもに限られていたが、地域環境の変化に伴って範囲が広がっていったのだ。こうした図書館としてのアイデンティティを決して失うことのないよう、「ヌティナム図書館の原則」は存在する。

3-5. ヌティナム図書館の「日常」

ヌティナム図書館は子供からお年寄り、障がいのある方まで性別国籍関係なく多様な人たちが利用する。それは図書館において当たり前のことかも知れないが、図書館を訪れる人たちの目的が必ず本の貸し出しに限定されているかというと、それは違う。



図7 ヌティナム図書館内装（2017年12月筆者撮影）

ヌティナム図書館では開館日は毎日のように様々なイベントや行事があるが、それ以外にも他の図書館では見受けられない「変わった」点が多くある。

ヌティナム図書館の利用に関して禁止事項や定められたルールは多くない。それは、すべて利用者がどのように利用すればほかの利用者たちと快適に場を共有できるのかを自ら考えられるようにという意図があったのである。ここでは些細なことではあるが、ヌティナムの考えが反映された部分を3点紹介する。

（1）図書館内での私語

公共図書館では一般的に館内での私語は厳禁である。しかし、ヌティナム図書館はゆっくりと読書や勉強をする人もいれば、子供たちが走り回り笑いあう声も聞こえる。これは、ヌティナム図書館が「人と人がつながる場所」としての役割をも果たしているためである。図書館内での行動は「ほかの人に迷惑をかけるように」するように定められている。どういった行動をとれば周りの人が不快な思いをするのかは子供であろうと自分自身で考えなければならない。

（2）信頼に基づく本の貸出

図書館の出入り口には盗難防止用のゲートは設置されていない。重々しいゲートを各出入口に設置し、本一冊一冊に IC チップをつけて管理することに多額の予算を設けるくらいならば、むしろ盗まれた本をもう一冊購入すればいいという考えがあるからだ。図書館側も利用者を信頼すると同時に、利用者も責任をもって本を借りるからこそ成り立つシステムである。

(3) 本の返却は自ら行う

返却された本は図書館職員が元の場所に戻すのではなく、借りた人が自ら定位置に戻すことになっている。本を返却する際に元の位置に自分の足で向かうことで同じ著者や似ているジャンルの本に新たに興味をもつきっかけになるかもしれないという考えがあるのと同時に、最後まで責任をもって本一冊と向き合い、次の読者へ引き継ぐという意味も込められている。返却する際ほかの利用者におすすめをしたいのなら一言コメントを添えて目立つ場所に置くこともできる。こうすることでほかの利用者も普段関心を持たないトピックの本にも触れる機会を作ることができる。一冊の本との出会いを大切にしてもらいたいというヌエナム図書館の思いが反映されている。

このように図書館の利用に関して多くのことが利用者の「自主性」に任されているのは、公共空間を利用する人が自ら感じ、気づきほかの人に配慮する行動を通して社会性を育てたいという思いがあるからである。

しかし、実際にすべての利用者がしっかりと周りを配慮して行動してくれるわけではない。定位置とはまったく違う場所に本が収納されていることも頻繁にあれば、羽目をはずした子供たちが共用パソコンを使用したことで壊れてしまったこともある。また、こういった図書館の方針を理解せず、図書館がうるさいと苦情を

言う利用者もいる。それでも一度は始動を試みなければ市民たちの可能性は伸ばせないという思いから、粘り強く続けている。

3-6. 取組①京畿道地下鉄書斎「開かれた図書館」

次に、ヌティナム図書館で行われているシティズンシップ教育の取組事例を3つ挙げる。

京畿道地下鉄書斎は「市民の力で作動する開かれた図書館」である。2016年に新分盆線東川駅、2017年に分盆線、新分盆線亭子駅に開館した無人図書館だ。駅という場合は常に人が行き交い、流動する空間である。しかし、忙しい日常の反復を象徴する場所として駅を何気なく通り過ぎるのではなく本一冊を探し読む余裕を持ってほしいという願いを込めて設置された。無人図書館であるため本を貸出するのに何の手続きもなく、会員カードもない。2週間という貸出期限はあるものの、誰がいつどんな本を借りたのか確認する術もない。しかし、駅に設置してある本はほとんどなくなるならないという。

パクさんはこの開かれた図書館を通して、「人々の市民としての力を作動させている」と感じている。市民たちは常に利己的で無力感を感じる一消費者としても存在するが、同じ人間が、誰が監視しているわけでもないのに決められたルールを守り本を読む行為を通して真面目な市民にもなれる。設置された本がなくならず、利用者が元の位置に自分たちで戻している姿は、それを証明している。

カンさんいわく、韓国人には「選民意識」が根底にあり、一般的に市民意識は「成熟させる」という表現

がよく使われるが、本当は市民は「誕生する」ものだという。制度化されたシステム、いわゆる秩序や規範、



図8 新分盆線東村駅に設置された京畿道地下鉄書斎

教育や訓練などの外部からの要因により完成させられる市民性よりは、市民自らが情報を求め意思を

決定する主体性により重きを置かなければならないということだ。図書館という期間は市民たちにああしな

さい、こうしなさいと答えを与える空間ではなく、市民自らが社会の中で各自の人生を歩んでいくの同時に、

社会を構成していく主体として自ら居場所をつかみとるための多様な活動と経験が提供される環境とし

て存在しなければならない。それゆえ、市民が誕生するために必要な本を精査し、コレクションして地下鉄

の駅に設置している。

3-7. 取組②「社会を含めたコレクション」

ヌティナム図書館は市民に必要な情報を提供するという本来の役割を果たすため、情報サービスに力を入れている。それが、図書館1階に設置された「社会を含めたコレクション」である。



図9 図書館1階の様子（筆者撮影）

ヌティナム図書館に所蔵されている本は主に二つの方法によって選別

されている。一つ目は司書たちによって精査されたものだ。ヌティナム図書館に勤める司書たちは週に一回新しい本の購入に関する会議を行っている。まず数人ずつのチームに分かれ、本の内容をチェックし、市民に有益なものかどうか意見を出し合う。また、近い将来社会で 이슈ーになりそうな主題に関する本を互いに紹介し合いもする。その後、チームで出た意見を全体で共有する時間を持ち、ようやく購入する本が決められる。ベストセラーだから、多くの人たちが好むからといって必ずしも市民たちに有益な情報を提供してくれるとは限らない。ヌティナム図書館を支えてくれる人たちによる支援金を使うため、本一冊の購入に関しても非常に注意深い検討の末なされるのである。二つ目は市民たちの要請による購入である。市民たちがこういった本が読みたい、情報を得たいという要請をすると、その要望に応えられる資料を司書たち

が検討する。検討の末、本を購入したり、場合によってはスクラップ帳をつくり情報を公開する。一方的な情報提供ではなく市民たちが「知りたい」と思うことに図書館側も関心を持ち、専門的知識を持って応えることで相互に知識を補っている。

- A. 政策問題
- B. 教育
- C. 民主主義と市民
- D. 芸術・創造・余暇
- E. 変化する世界
- F. 些細ではない日常
- G. 尊厳・多様性

└差別と無知の向こう
 虐待に第三者はいない
 死の自己決定権 など



図 1 0 コレクションの7つのカテゴリーと詳細（筆者撮影）

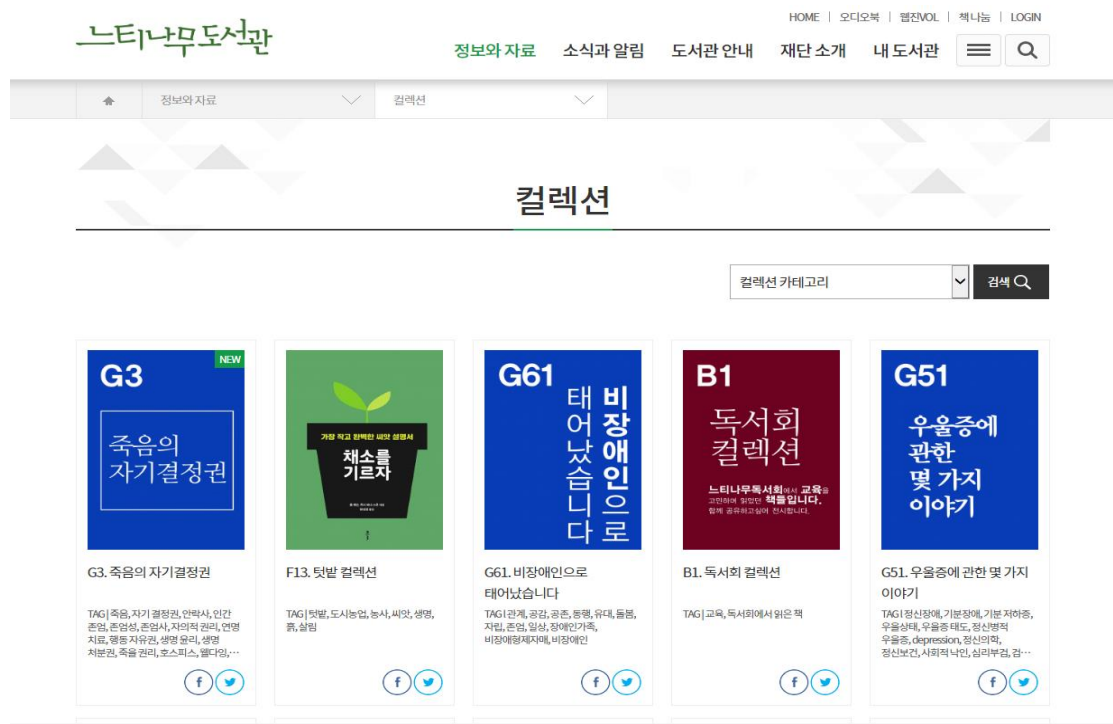


図 1 1 オンライン上でコレクションにある資料を検索できる（ホームページより）

社会を含めたコレクションはこうして図書館に蓄積された情報を詳細なカテゴリーに分けて一目で情報を得られるようになっている。現在は政治や社会的なものから芸術や医療に関するものまで7つのカテゴリーに分けられている。また、大きいカテゴリーの中にも詳細なテーマがさらに分化している。このカテゴリーは現在

社会で問題になっていることだけでなく、市民たちに一度考えるきっかけを持ってほしいものも含まれている。

資料の中には書籍以外にも新聞雑誌、論文、映像資料、ウェブ情報などあらゆる形態で一つの場所に情報が集約されている。

社会を込めたコレクションは図書館内だけでなく、オンラインでも情報が一目でわかるようにホームページが構成されている。カテゴリーの中に新しく情報が追加された場合はホームページのトップで確認でき、所蔵されている資料をキーワードやカテゴリーで検索することも可能である。図書館が情報を蓄積し、提供する場所として作用するために様々な工夫がなされている。

3-8. 取組③「共論場」マウルフォーラム

マウルとは、日本語で直訳すると「町」を意味する。しかし特定の範囲までと決まりがあるわけではなく、人と人のつながりや同じ地域を故郷とする人たちなど、マウルの中にはあいまいで温かい「地域を基盤として結ばれる共同体」のような意味をも含む。ヌティナム図書館は図書館のあるマウルの人たちに本を開くことで自ら関心を持って学ぶことを大切にしているが、その学びや考えを共有する時間も設けている。それが、2016 年に初めて開かれた「マウルフォーラム」である。以下ではマウルフォーラムの開催準備や当日の流れについて記述する。

(1) マウルフォーラム開催に向けた準備

マウルフォーラムで最も大切なことは、「市民たちが主体的に参加すること」である。昨今では市民への自己啓発プログラムなどが各地で開催されているが、その多くは専門家による一方的な講義形式で、聞く手側が受動的になりやすい。しかし、ヌティナム図書館の原則にもあるように、図書館で行うあらゆる部

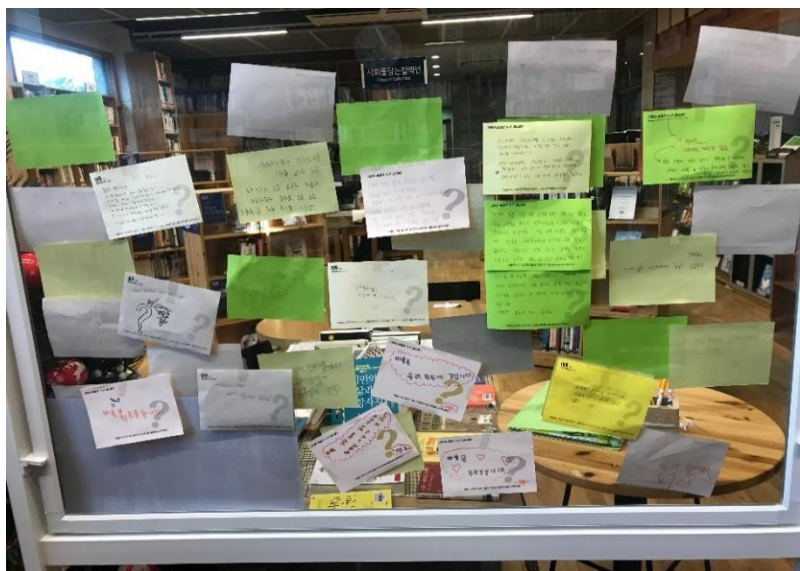
分において自発性を大切にしている点から、マウルフォーラムは参加者である市民自らが多く発言できるような運営方式にした。

2017 年度のマウルフォーラムのテーマは「日常生活の中の民主主義」である。マウルや地域に限らず、職場や私的領域において民主主義とは何かをじっくりと市民たちに問いかける場を設けた。家族や恋愛、食事など日常の当たり前なことから、マウルに存在する図書館だからこそ考えられることまで、「民主主義」と一言で言っても幅広い分野に話題は及んでいる。これらのテーマに沿った専門家たちを進行役及びレファレンスパネルとしてフォーラムに招く。（表参照）図書館の 1 階に設置された質問掲示板に市民たちはマウルフォーラム開催のポスターを見て、フォーラム当日の前にそれぞれが現時点で持っている意見や専門家への質問をポストイットに書き貼り付ける。ここで集められたコメントはフォーラム開催前に専門家たちに共有され、フォーラム当日に話題として意見交換がされたり、専門家からの回答をもらえる。

また、フォーラム開催前からテーマに関する参考図書たちを集めたコーナーが作られる。事前知識がまったくない人や、テーマを聞いて興味を持った人がこれらの図書を読み知識をつけられるよう司書たちが内容を精査したものだ。



← 図 1 2 マウルフォーラム開催（「それでマウルは誰のものですか？」の会）のポスター（ヌティナム図書館ホームページより）



← 図 1 3 市民たちが書いた質問や意見（2017 年 12 月筆者撮影）



← 図 1 4 マウルフォーラムのテーマに関連した図書たちを集めたコーナー（2017 年 12 月筆者撮影）

実施日	テーマ
2017 年 7 月 1 日	<u>「家族、恋愛において民主主義ですって？」</u> 進行：韓国放送通信大学教授 ペク・ヨンギョンさん レファレンスパネル： 社会学者 キム・ウンハさん 社会学者 キム・チャンホさん
2017 年 8 月 25 日 (亭子駅京畿道地下鉄書 斎開館記念式)	<u>「マウルで民主主義ですって？」</u> 進行：亜洲大学社会学科教授 ノ・ミョンウさん レファレンスパネル： 京畿道連立副知事 キム・ドゥックさん 社会的協同組合「サダリ」 パク・ヒョンヨンさん 城南民主市民学校代表 イ・ジェ Chol さん サニーベリーアパート入居者代表 ソ・ジョンイルさん 水原市議会議員 ジョ・ミョンジャさん
2017 年 11 月 11 日	<u>「食べて生きる中で民主主義ですって？」</u> 進行：亜洲大学社会学科教授 ノ・ミョンウさん レファレンスパネル： ソウルエネルギー公社 前エネルギー気候政策研究所副所長 イ・ジンウさん 翰林大学社会経済学研究教授 ジョ・ヒョングンさん
2017 年 12 月 2 日	<u>「それで、マウルは誰ののですか？」</u> 進行：慶熙サイバー大学社会学教授 カン・ユンジュさん レファレンスパネル： ソウル特別市城北区区庁長 キム・ヨンベさん 龍仁市水枝区区庁長 アン・ビョンリョルさん

(2) マウルフォーラム当日および情報共有

マウルフォーラム当日は多くの市民誰でも、できるだけ多くの人が参加できるよう1階の本棚の配置を替えて進行役とレファレンスパネルを囲むようにまるく椅子を並べる。時には椅子の数が足らず立って参加する人もいるほど、多くの市民たちが関心を持ってやってくる。フォーラムは基本的に質問掲示板に貼られた質問や意見をベースに進行役によって進められる。レファレンスパネルから専門的な「正しい」回答をもらい

市民が聞くに徹するのではなく、それぞれがひとつの質問に対してどう考えるのか、どのような思いを持っているのか、相手の意見を尊重しつつも自分の意見を述べる場である。決して意見のぶつけ合いをするのではなく、自分の経験から感じることを共有し、他の市民の経験に耳を傾ける「共論場」として作用しているのがマウルフォーラムである。

マウルフォーラムは、直接図書館を訪問できない市民たちのために facebook を通じて生中継される。動画は生中継が終わった後も facebook を通じてだれでも視聴できるため、フォーラム



図 1 5 2017 年 12 月のマウルフォーラム当日（ヌティナム図書館撮影）

ラム当日に日程が合わなかった人も情報を得ることが可能だ。また、図書館のホームページにはフォーラム当日の写真と交わされた意見などの要約も公開されるため、情報提供はしっかりとなされている。

第 4 章. 事例分析

第 3 章で論じた通り、ヌティナム図書館で行われている様々な取り組みは日常的なものからイベントまで多様に存在する。ここで、それらの取り組みをまず「図書館」という脈絡を考慮したのち先行研究で事例

分析のものさしとして提示したシチズン・リテラシーの観点から考察していく。

4－1．「図書館」という空間でこそできること

4－1－1．「図書館」の役割

まず、ここで必ず確認しておくべきことはヌティナム図書館は他の何でもない、「図書館」であるということである。館長のパクさんは図書館という空間について自著で次のように話している。

「公共図書館が形成されてきた歴史が語る通り、図書館の役割は必要な資料だけを提供するサービスセンターではない。利用者たちが市民として成長し共に公共性を実践できる力を育てる場所である。それゆえ私たちは図書館を訪ねる全ての人々が気持ちよい時間を楽しんでくれることを望むが、デパートやホテルの入り口で腰を90度曲げながら『愛しています、お客様』とあいさつをするような歓迎はしようとしません。代わりにいつでも利用者たちが寄与できるようにそばにしようとする。公共性を体で覚え実践できるようにということである。図書館が公共性の砦だと言うことは、公共性を享受する場所であるだけでなく、公共性を自ら実践できるよう『体得』する場であるからだ。実際に図書館は生まれてから初めて公共性に出会い理解し、学ぶ場所である。好きな本がいつも書架にあったのに無くなったと泣く子どもが、その本がほかの人が借りていった約束した日になれば返してくれるということを理解しながら、自分が借りた本も誰かが待っているかもしれないと考えるようになる。指示や統制ではない尊重と配慮の原理を学ぶ。年齢や学力に関係なく多様な人に出会い、付き合いながら差異と多様性の価値を確認し、共に生きていく方法を体で覚える。私たちが図書館で希望に出会う理由である。」（『利用者を王様のようにお招きしません』、

パクさんは、ヌティナム図書館を代弁する言葉として、「教えなくてもより大きい学び場」という言葉を強調している。子ども図書館としてスタートした時の空間の役割は開発が進み不安定な状態の地域において子どもたちが安心して利用できる「居場所」としての役割が第一であった。しかし、あえて「図書館」という媒体を選択したのは何となくではなく、図書館が公共性と知的自由を体現する空間であるという特殊性を利用したかったからである。

「公共性という言葉をご存知かと思いますが、図書館には誰でも来れます。障害がある人でも、子どもでも、大人でも、誰でも。何の敷居もなく入ってこれる空間です。これは私たちの図書館だけがそうなのではなくて、図書館という概念が、思想的に根拠をおいている機関がそうなのであって。では知的自由とは、その「誰でも」が入ってきたときに、自分が見たいものや知りたいもの、どんなことでも自由に見られなければならないわけで。それをじっくり見ようがちょっとだけ見て通り過ぎようが、それはその人の自由ということでしょう。だから、学校に子どもたちを縛って、決められたカリキュラムに沿って教えるのではなく、人間の自発性に基盤をおいて、他の人と相互共有もしながら自ら学んでいく場所が図書館という場所です。」（2018年12月カンさんの発言）

その対象が初期には子供たちだったのであり、現在は市民全体へと拡大していった。大人と子どもで分け

るよりは、同じ地域で生きる者として、大人たちが夢を見て学ぶ環境に子どもたちも一緒にいることがベストであると考えたからである。

第 1 章の先行研究部分で「シティズンシップ教育は国が違えば中身も違う」ことを示したが、それだけでなくシティズンシップ教育を担う機関によっても色が変わってくる。先行研究で示した韓国で実際に行われているフォーマル教育は選挙管理委員会が管轄しているものであるため、「民主主義社会」が正しく作動するようための教育といった色が強かった。しかし、図書館という機関だからこそできることは、市民全員が何のはばかりもなく対象になる、社会にあるすべての事柄がテーマになる教育である。民主主義や選挙といった枠にとらわれず、子どもから大人まで地域や社会の構成員として図書館を利用することで公共性を体得し、市民の役割について学んでいくことが出来る。次に同じ図書館でも公立と私立によって異なる点を整理する。

4-1-2. 公立ではなく「私立」図書館だからこそ可能なこと

政府主導で予算を与えられて運営される公立図書館に対して、ヌティナム図書館は「私立図書館」として運営している。他の機関と図書館が異なる点は「目に見える成果が現れない」ことである。当たり前ではあるが、図書館が存在することで市民は情報を得られるという点において、市民の役に立ってはいる。しかし、政府からの運営予算を継続してもらうためには図書館を運営することでどれほどの「成果」があったのかをアピールする必要がある。公立図書館では、そのアピールを「数字」で行っている。今年度何万人が図書館を利用した、文化プログラムを何回開催したなどの数字でアピールしなければならないうえ、それらを

書類で提出しなければならない。その点から私立図書館は自由であるといえる。第3章で述べたように、ヌティナム図書館では週に1回司書たちが集まりどういった本を入庫したら市民たちに有益な知識与えられるのか、会議を通して共有してから入庫を決定している。また、図書館の出入り口に盗難防止のゲートも作らず本一冊一冊にICチップもつけていない。公立図書館では本何冊が貸し出されたのかを数字で徹底的に管理しなければならないため、利用者が好みそうな「世間一般で」人気の本は無条件で入庫し、月間にどれほどの貸出があったのかをカウントすることのみアピールが可能である。こういった点から私立図書館であるヌティナム図書館は自由である。子どもたちが図書館内で走り回り、利用者同士がコミュニケーションをし、コーヒーを片手に読書を楽しむこともできる。しかし、私立図書館にも限界点がある。それは運営のための経済力という点で弱いことである。ヌティナム図書館の運営資金はすべて支援者からの寄付金で賄われているが、ただやりたいことを図書館の中でやっているだけでは運営にかかる資金は調達できない。ヌティナム図書館の活動が地域社会にとって、市民にとってどれほど有益であるのかを外に発信していくことが運営を継続するための唯一のカギである。そのため、行政機関だけでなく、民間企業にもヌティナム図書館の活動についてプレゼンテーションを行い、これからどういった事業に着手していきたいのかを継続的に発信している。賛同してくれる市民や、企業が多ければ多いほど充実したプログラムを企画運営していけるため、職員たちはヌティナム図書館の広報活動にも力を注いでいる。

この二者の違いから分かることは、私立図書館は経済力という点以外、その空間で行えるシティズンシップ教育に制約がないということだ。公立図書館では図書館が市民にどれほど役に立っているのかを示すことを数値とともに書類で提出しなければならないため、職員たちはその作業に忙しい。図書館で文化ブ

プログラムなどを開催するにあたって、複雑な工程を経なければならず、ましてや市民が自分で企画してプログラムを運営することは非常に実現可能性が低いただろう。それに対して私立図書館であるヌティナム図書館はそういった書類作成や行政への報告にかかる時間がないため、その分図書館の運営そのものに時間をかけることが出来る。本論文の事例で取り組みとして提示しなかった様々な取り組みの中には他の市民団体から場所を貸してほしいという要請を受け、図書館の運営サイドは全く関わらず行われるイベントも多数ある。これはヌティナム図書館が龍仁市に住む市民全員に開かれた場所として、市民のためになるプログラムであれば多くの人たちに参加してもらったほうが良いという考えのもと、図書館という場所を提供するのだという。一部の閉ざされた空間でのみ行うのではなく、イベントやプログラムがあることを知らずに図書館を訪れた人も興味があれば参加できるよう、オープンスペースで行っている。図書館という場所がシティズンシップ教育を行う空間として作用するためには、この「私立」という自由さも重要なキーワードになってくる。

4－2．ヌティナム図書館におけるシティズンシップ教育

次に、第1章1－3で言及したシティズン・リテラシーに関する3つのキーワードからヌティナム図書館のシティズンシップ教育について分析する。

4－2－1．地域や社会に対する愛着

地域や社会に対する愛着というものは、誰かに教えられて身につくものではない。地域に住む市民自らが、その地域の構成員として自覚を持ち、自分のこととしてとらえることは「自覚」するほかに術はない。龍

仁市はいまだに、ずっと龍仁の地に住みながら地域に愛着を持ち市民活動を行ってきた人たちよりは、移動する人が多く変化が多発する地域である。しかし、ヌティナム図書館で行われる活動に参加する市民からは、「もともとは地域に愛着がなかったが、実際に暮らしながら、『それでも自分の子どもにとってはここが故郷になるのだな』という考えを持つようになった」という声も多いという。

まだ開発が完全に終わったわけではないため開発に関して市民間での葛藤もまったくないわけではない。しかし、それでも市民たちはそれぞれ地域をよくする活動をするために団体をつくり、龍仁市民としての意識を持とうと取り組んでいる。このような団体たちが集まって「東川マウルネットワーク」を結成し、ヌティナム図書館も入っている。パクさんは、インタビューで「それぞれの市民団体が異なる考えを持っているのは当たり前前で、ぶつかって闘ったこともあれば、避けたこともあった。しかし、団体や集まりが多くなり活発に活動することで、どういった社会を創っていきたいのか多様な意見が出るこそが大切だ」と語った。なぜなら、みんながみんな同じ考えを持っていたら戦時中のようにそれが間違った方向に進んでいることにも気づけないからである。しかし、多様な考えがあればそれぞれの意見が出会い互いに学び、会話をしながらより良いものを創ることができる。意見や考えはそれぞれ違えど、同じ地域で共に未来を創っていく仲間として活動していくことで、市民の力で地域を創っていくことができると考えている。ヌティナム図書館、そして図書館を利用する市民たちはそれぞれ移動してきた新しい故郷について考え、その地域の構成員として地域の未来を考えていこうとする姿勢が見える。

4－2－2．自発性

他の図書館でヌティナム図書館のようにコミュニケーションを重要視している図書館が見受けられないこともすでに特異な点の一つではあるが、ヌティナム図書館が利用する市民たちの自発性を重んじている点は言及に値する。ヌティナム図書館では本を借りるという行為ですら、返却し元の位置に自分で戻さなければならぬなど、自発性を求めたルールを設けている。また、利用者の図書館内での行動に関して、図書館側の態度が「自発性」を重んじることを象徴している。

例えばコンピューターの利用に関して、コンピューターでゲームをしようが映画や動画を見ようが図書館側は干渉しない。しかし、そうした場合利用者が自らある程度利用したなら、次の人に自ら譲ることが望ましいが、何人かの子どもの場合朝から晩まで一人で使ってしまうという。他の子どもが来てコンピューターを譲ってくれと頼むと、自分が先に来て使い始めたのだからだめだという子どもたちが多くなってしまったそうだ。それゆえ現在は仕方なく使い始めて1時間経過すると自動で電源が落ちるように設定した。また違う例をあげると、コーヒーや飲み物はもともと許可していたが、そうすると人間の習慣上誰かがパンやお菓子をもってきて一緒に食べようとするという。しかし食べ物は外か給湯室を利用するようにと決めている。

「正直、本を見ながら食べ物を食べたところで問題はないです。コンピューターの利用に関しても誰かが一日中動画を見続けても別に問題はないですよ、個人の自由ですから。ただ一つだけある問題は、そういった個人の行動のせいでほかの人が迷惑をこうむるわけじゃないですか。食べ物に関してもコンピューターに関しても、こういったものは予想可能な問題で、それにも関わらず最初から「禁止」と決めつけるのではなく、それでも一旦は始動をしてみて、問題が生じたらそのたびに対応するようにします。他の人に迷惑をかけない

うえでなら何をしたらだめというのではなく、なんでもしてよい。ただ、迷惑をかける行動に関してだけは私たちも止めなければならない。」（2018年8月インタビューより）

図書館を利用する上での基本的な行動は、利用者が自分自身でどういった行動をしたら他の人に迷惑をかけるのか、公共の場においてふさわしくない行動なのかを自発的に考え社会性を身に着ける役割を果たしている。他の図書館の場合あちらこちらに禁止事項の書かれた張り紙があったり、図書館内の設備を使う上で決められた手続きを踏まえて利用しなければならない場合が多い。ヌティナム図書館は利用する市民を信頼し、最初からルールを決めるのではなく一度任せてみることから始めるという点から自発性を尊重していることがわかる。

また、前章で紹介したマウルフォーラムに関しても市民たちが自発的にイシューについて考え発信しなければならないという大きな意味をもっている。最近韓国では「^{サラムチェック}사람책（人本）」というプログラムが人気である。サラムチェックプログラムはソウル市立大学が運営するソウルヒューマンライブラリーが行っているもので、図書館で本を借りるようにヒューマンライブラリーでは「本」として登録された様々な分野の人たちを「貸出し、その人たちが持っている経験や知識、情報を直接会って聞くことができる」というものである。誰もがサラムチェックになれば、誰でもサラムチェックを借りることが出来る。多様な経験を持つ市民との交流といった意味ではマウルフォーラムと同様に知識や理解を深めることができるが、サラムチェックプログラムはあくまでも「受動的に」話を聞くことに焦点を当てている。それに対しマウルフォーラムはバックグラウンドの異なる市民たちが集まりそれぞれの観点から多様なイシューに対する意見を出し合い、その空間において専門家はあくまで

も補足をする立場にあるという点が特徴である。マウルフォーラムではヌティナム図書館が重んじている自発性が基盤にあることが、運営の原則となっている。

4-2-3. 変化に対応する力

ヌティナム図書館を社会や地域の変化に応じる能力という文脈で分析したとき、二つの観点から見ることができる。

一つ目は子ども図書館から公共図書館へと図書館を利用する対象者の範囲を広げたことである。ヌティナム子ども図書館として 2000 年にスタートしたとき、開発真っ只中の龍仁の地に子どもたちが遊べる空間がなかったこと、新築されたマンションに引っ越してきたのは幼い子どものいる家庭が多かったことから「子ども図書館」の形で出発した。しかし、7 年という歳月の中で、子どもたちは成長すると同時にヌティナム子ども図書館も成長していったといえる。所蔵している本の数や、利用者の数といった数値的な部分でも図書館の成長をはかることもできるが、龍仁市の開発が安定していくと共に「ヌティナム子ども図書館」という名前、空間が地域に根差していったということだ。しかし、その成長はパクさんをはじめとする図書館関係者による努力によるものに限らず、小さな文庫規模で始めた図書館を利用する子どもや父親母親たち自身が変化していったことで成し遂げられたものである。それは、トウミ会のような形となってあらわれるものだけでなく、子どもたちが積極的に本を読むことや他の子どもを気づかうといったひょっとすると些細な変化である。それでも、子ども図書館という空間で利用する人たちが誰も知り合いのいなかった地で少しずつつながりをつくり、社会性を身に着け自発的に活動する姿は、図書館の有用性をはっきりと証明した。

開発や図書館利用に関する状況の変化に限らず、空間を通して人の変化が見られたことでヌティナム子ども図書館自体も公共図書館として変化したのである。これは、シチズン・リテラシーで定義される部分に当てはめれば図書館自体が変化することで、図書館として市民に提供できる教育を変化させたといえる。

二つ目はヌティナム図書館で行っている取り組みから評価できる。ヌティナム図書館の特徴は図書館という機関が一方的に教育を行うのではなく、それぞれの取り組みが図書館を利用する市民たちによって主体的につくられていくという点である。社会を込めたコレクションから読み取れることは、市民たちが自分で現代社会に存在する 이슈 に問題意識をもち、その情報を知りたいと意欲を持つこと、そしてそうして集められた情報が他の市民たちにも共有されていくことで知識の輪がひろがっていくことの有用性である。それは、図書館に勤める司書だけでは考えもつかないようなトピックを市民が提供してくれるともいえる。そこには日々変化する地域や社会で暮らす市民たちが学ぶことで変化に対応しようとする能動的な意思が見受けられる。また、マウルフォーラムに関してはテーマ自体が社会を反映したものであることからフォーラムを通して得られる情報や能力もまた必然的に状況に合わさったものになる。テーマに関して市民一人一人が関心を持ち学ぶことにとどまらず、それぞれの考えを共有できる「共論場」としての機能は決して見逃すことのできないものである。

ヌティナム図書館の事例からわかることは、まず図書館自体が社会や地域の環境、状況変化まず対応して変化していくこと、そして図書館の内部で訪れる市民たちに提供される情報やそこで身につく能力もまた日々変化していていることである。それは図書館一方だけの変化にとどまらず、利用者側の市民が



図 1 6 マウルフォーラムのチラシ（ヌティナム図書館提供資料）

気づかせてくれることもある、相補的な関係であるといえる。

4-3. ヌティナム図書館の展望

ヌティナム図書館自身が目指す地域や社会における役割についてインタビューを通して伺った。具体的に目標が決められているわけではないと前置きをしつつ、話してくださった。

「ヌティナムという名前の由来もそうですが、私たちが市民に提供しようとするサービスに図書館の実現した

い存在意義は表れていると思います。どんなことでも市民自身が知りたいと思うことにプラスして、自身が想像もしなかったことまで、この図書館という空間で自分で発見すること。そして、それが本人だけで完結するのではなく、その人が地域や社会に出て行って社会を、世界をまた変えていく。そんな場所になることを望んでいます。」（2017 年 12 月カンさんの発言）

この発言にヌティナム図書館の謙虚さが現れている。図書館自体が先頭に立ち社会を変えていこうとするのではなく、あくまで図書館は市民が社会を変えていくための通過点に過ぎないということだ。ヌティナム図書館自体がパクさんという一人の市民によってはじめられたものであるが、創立当初から図書館のビジョンは変わっていない。ヌティナム図書館は 1 本のけやきの木であって、そこは市民がじっと安住する場ではなく、市民たちは一度腰を下ろしたらまた立ち上がって木陰から出ていかなければならない。だが、その木陰にいる時間に想像もしない多くの収穫があるのが、これからもずっと変わらないヌティナムの姿である。

子ども図書館として龍仁の地で「ヌティナム」の名前で活動し始めてから早くも 20 年が経過し、図書館で働く人たちもまた、これからのヌティナムはどうあるべきか、どういう方向性に向かっていくべきかまだまだ手探りな状態だという。しかし、このヌティナムをこれから先 10 年 100 年と枯らさずに育てていくために、今日の前にある市民に必要なことを一つ一つこなしていくことが今できる唯一の方法である。図書館だけが一人で頑張らなくてもよい。信頼できる市民たちがまた、予想もつかないような新たな種をまいてくれることもあるからだ。焦らずにぶれずに、地域で根を張り続けているヌティナム図書館の姿がまだ未知数な未来でも大丈夫だと語っているようだ。

第5章 結論

ヌティナム図書館が大切にしている「教えなくてもより大きい学び場」という言葉は、これからのシティズンシップ教育の望ましい姿を代言する言葉といえる。ヌティナム図書館は図書館自らが手取り足取り市民を「啓蒙」することはしない。図書館の司書や職員たちは市民にとってどのようなプログラムがあればよい機会になるのか、どういった情報が社会の構成員である市民たちに有益化を考え、枠組みはつくるけれどもそれ以降はすべて市民にゆだねられているからである。地下鉄書斎も社会を含めたコレクションも、マウルフォーラムですら市民が自発的に動かなければ、その真価は秘められたままである。このヌティナム図書館の取り組みを一般的に「教育」という言葉をもって表現してよいのか、疑いの余地もあるかもしれない。しかし、行動的シティズンシップを実践をもって体得する場所としてヌティナム図書館はこれからの社会で本当に必要な「シティズンシップ教育」実行している機関である。カンさんの「市民は成熟させるのではなく、自ら誕生する」という言葉の通り、シティズンシップもまた与えられるものではなく、自ら育てるものであるからだ。

第3章の事例調査で整理したが、ヌティナム図書館はその原点に振り返ればわかるように、一人の市民が地域や社会をよくしたいという純粋な思いからスタートした場所である。一人から始まって、その意思に賛同する人たちがまた支えていって今の姿にまで成長した。図書館の運営資金に関しても市民やヌティナムの考えに賛同する民間企業、龍仁市による補助によって賄われており、図書館で行う様々なプログラムも市民によって進行されている。それゆえヌティナム図書館は市民たちを「利用者」としてだけでなく、と

もに創っていく「仲間」としても認識している。だからこそ図書館という空間を市民一人一人が、時には「公共性を体得する場所」として、時には「情報を取得し、意見を交換する場所」としてその可能性をいくらかも広げていくことが出来るのだ。

韓国社会は戦後から市民の声や力が社会を変えてきた。その歴史はひょっとすると市民たちの力が偉大であるかのように見えるかもしれないが、実際の韓国社会の日常には学歴主義や就職難、男女不平等、長時間労働など世界各国と比較して「生きにくい」といえる社会問題は多く存在する。しかし、シティズンシップ教育を経て行動的市民が誕生するならば、社会はいくらでも市民が変えることができるのではないだろうか。そのために、自ら地域や社会を愛し、多くのことに関心をもって学ぶことでシティズン・リテラシーを習得しなければならない。その過程においてヌティナム図書館は大きな役割を果たす「新しい」シティズンシップ教育の場として作用するだろう。

また、この事例研究をもってあらためて日本社会に目を向けたときにも本論文の考察は大きな意義をもつ。日本もまた、韓国社会に共通する問題が山積みになっているのにいつまでたっても事なかれ主義をつらぬく市民の姿のままである。社会にある問題たちを「自分のこと」ととらえること、その解決のために自ら学び、意見を交わそうとする姿勢が見られないのが現状である。この日本にもまたヌティナム図書館のような場所があれば、大きなけやきの木の下で誰もが自由に知的意欲をそそられるような空間を共有出来たら、日本にも市民が誕生するだろう。

「世界を変えてきた力を一文字で表現できる世界公用語は『？—疑問符』ではないだろうか。疑問符は

通年や常識といった名前で硬く占められていた掛け金を開ける鍵である。理由と背景を知ろうとすると
初めて脈絡を見ることが出来る目が開かれ、脈絡を知れば『そうじゃないかもしれない』という可能性を考
えられるようになる。初めて代案の想像力に火ついたということだ。（中略）私たちが世界を学ぶ力もまた
好奇心から始まる。小さい子どもがいる家で一日中最も多く聞く言葉は『これ何？』『なんで？』『私が、
私が！』この3つである。目に入ってくるものすべてが気になっていじってみたくなる。その輝く瞳といたら！
疑問符を許容するということは時には忍耐力を要求するかもしれないが、少しだけ時間が経てば未永くた
くさんのプレゼントを授かることになる。」（『夢見る権利—どうして俺みたいなやつに本をくれるんだ』、
221,222p）

現代に生きる私たちは忙しい日常に追われて自分のことに精一杯な毎日を送っている。しかし少しでも足
を止めて日常にある些細なことに疑問を抱き知ろうとすることだけで、人は市民として芽を出すだろう。そう
して芽を出した市民たちが育っていくために土台になる場所が、市民たちが吸収すべき様々なコンテンツを
水のように降り注ぐ様々な機会が必要である。

【脚注】

1. バブルセブン地域：2006 年政府が不動産価格が泡が多く発ったと注目した 7 つの地域。住宅価
格の等級を決める核心地域であるソウル市の江南区、瑞草区、松坡区、陽川区と京畿道の城南市分
盆、安養市坪村、龍仁市。

2. 宅地開発推進法：都市の住宅難を解消し住宅建設に必要な土地の取得、開発、供給および管理等に関して特例を規定することで国民の住居生活の安心と福祉向上に貢献するために制定された。

3. 準農林地制度：短期間の大規模新都市開発に対する批判と 1990 年代の国際化の流れの中で脱規制と民営化の要求が大きかったため政府は小規模分散的な宅地開発と準農林地開発の許容で政策の方向を定めた。1993 年に国土利用管理法が改定され改定前 10 つに分けられていた用途地域（都市地域、農林地域など）を 5 つに簡潔化した。

4. IMF 金融危機：1997 年 7 月のタイ通貨バーツの暴落を皮切りに、フィリピン、インドネシア、大韓民国（韓国）などアジア各国をまたたく間に襲った一連の通貨・経済危機をいう。（ブリタニカ国際大百科事典）

【参考文献】

E・ハミルトン、2003、『成人教育は社会を変える』、玉川大学出版部

不破和彦、2002、『成人教育と市民社会—行動的シティズンシップの可能性』、(株)青木書店

ジュギョンシク・パクヨンウ、2010、『龍仁市住宅市場の成長と空間的分化に関する研究』、大韓地理学会

(주경식・박용우, 2010, 『용인시 주택시장의 성장과 공간적 분화에 관한 연구』, 대한지리학회)

高選圭、2011、『韓国のシティズンシップ教育第 1 回—韓国のシティズンシップ教育と選挙管理委員会

の役割』、「Voters」第2号、明るい選挙推進協会

キムジェグク、2003、『龍仁市都市基本計画の問題と課題』、京畿研究院

(김제국, 2003, 『용인시 도시기본계획의 문제와 과제』, 경기연구원)

ヌティナム図書館、2018、『文化体育観光委員会ヌティナム図書館視察』

(느티나무도서관, 2018, 『문화체육관광위원회 느티나무도서관 시찰』)

朴英淑、2003、『小さな図書館からマウル共同体文化を起こす人たち』、アルマ出版社

(박영숙, 2003, 『작은 도서관에서 마을 공동체 문화를 일구는 사람들, 알마출판사』)

朴英淑、2014、『利用者を王様のようにはお招きしませんー図書館、市民が誕生する第3の空間』、ア

ルマ出版社

(박영숙, 2014, 『이용자를 왕처럼 모시진 않겠습니다ー도서관, 시민이 탄생하는 제3의

공간』, 알마출판사)

朴英淑、2014、『夢を見る権利ーどうして俺みたいなやつに本をくれるんだ』、アルマ

鈴木崇弘ほか、2005、『シチズン・リテラシー 社会をよりよくするために私たちができること』、教育出版

(株)

朴英淑、2014、『夢を見る権利ーどうして俺みたいなやつに本をくれるんだ』、アルマ

T・H・マーシャル・トム・ボットモア、1993、『シティズンシップと社会的階級ー近現代を統括するマニフェス

ト』、(株)法律文化社

尹敬勲・上原直人、2012、『韓国における民主市民教育の理論と実践：選挙管理委員会の役割』、

【参考サイト】

経済産業省ホームページ『第2節 アジア通貨危機後の韓国における構造改革』（アクセス日 2017年11月15日）

（<http://www.meti.go.jp/report/tsuhaku2014/2014honbun/i2220000.htm>）

2017 年 龍 仁 市 統 計 年 報 （ ア ク セ ス 日 2018 年 10 月 29 日 ）

（http://www.yongin.go.kr/user/bbs/BD_selectBbs.do?q_clCode=1&q_lwprtClCode=&q_searchKeyTy=sj__1002&q_searchVal=&q_bbsCode=1032&q_bbscttSn=20180531171223954&q_currPage=1&q_sortName=&q_sortOrder=&）